8.『遠野物語』の話を基礎に新たな「語り」の文化を

『遠野物語』の話を分類すると大きく四つに分けることができます。ひとつのかたまりが、「山男、山女、山人」の話群です。そして、その対局に、「村や町の人々の生活」の話群です。先ほどの「九十九」話の津波にあった男の話などもその中に入ります。そして、十文字を描くようにして、もうひとつの対局の話群を、「馬、狼、熊、猿、鳥」などの動物の話群と「オシラサマ、ザシキワラシ、カッパ」などの精霊と言っていいでしょうか、そのような仲間の話群に分類すると、だいたい均等に当てはめることができます。

最初にお話した毛筆の稿本は、2冊の和綴じの本として保管されていましたが、「一」が「七十三」話までで、「二」が「七十四」話以降に分けられています。これも、前半の73の話もこの4分類にきれいに分けられ、後半も同じように構成されているのです。

何を言いたいかと言いますと、柳田は、話のバランスを考えて、四つの種類の話を並べているということです。そして、『遠野物語』の話でおもしろい話は、この四つの分類を自由に行き来している話であると思います。たとえば、神隠しの話は、「村や町の人々の生活」と「山人」の分類を行き来していますし、「オシラサマ」の話は、「生活」「動物」「精霊」の三つの部分とかかわってきています。このように矢印で話の位置づけを表していくと、矢印が多ければ多いほど、想像力をかき立てられる豊かな世界になると私は勝手に解釈しています。

きっと『遠野物語』をベースにしたような矢印がたくさん描ける文学が、そう遠くない日に出現すると思います。

そして、もうひとつ、激しい時代の変化の中から、これからの未来を私たちがどういうふうに創造していくかという肝心な話になりますが、遠野の地が、もう一度、豊かな「語りの世界」を意識することは、とても大事だということも強調させてください。

私は、小学校の教員を36年やってきましたけれど、最終的には今の子供たちの教育課題は「コミュニケーション能力」だと思うようになりました。

今は、本当に危機的な状況だと私も思うのですが、その現代人の「コミュニケーション能力」の問題、あるいはもう少し柳田的に言うと、言葉の力でしょうか、そうした問題に一石を投じるためにも、『遠野物語』の世界、遠野の「語りの世界」にもっと光が当たってもよいのではと思います。

ほんの一例ですが、武蔵野の子が遠野に来て驚くのが、「子ども語り部」の実践です。驚いたからと言って自分はできないとあきらめないで、東京に帰って、他の子供たちの前で、「昔あったずもな」で、「担ぎ棒」の話をしてくれます。すると、1年生が目の前で聞いているんですけど、「おもしろかった？」と聞くと、「わけが分かんないけど、おもしろかった」と言うぐらいに全校的に話題になるわけです。地域間交流をしていると、こうした場面は数限りなくついてくるものですが、その中でも、遠野には「コミュニケーション能力」を育てる磁場があるように思います。

遠野には、まだ「語り」が生きていますので、先ほどの「耳で聞いた話」を大事にして、新しい『遠野物語』ではないのですが、これから100年の遠野の文化を、単なる「書き言葉」の文化ではなくて、「話し言葉」の文化として意識していただければありがたいなと思います。

時間が来ましたので、これで終わりにしますが、あとで懇親会があるということなので、懇親会のときに見ていただけたらと思うのですが、「ふるさと学校体験留学」で附馬牛小学校でお世話になって、川島さんのお宅にホームステイした子が学校に帰って、自由研究で遠野のことを調べてきたものがあります。東京の子が、どのように遠野を理解しようとしたのかを感じとっていただければと思います。

また来年も子供たちを連れてきますし、『遠野物語』の次の100年に向けた遠野の「語りの世界」をみなさんと一緒に楽しんでいけたらいいなと思っていますので、これからもよろしくお願い申し上げます。ありがとうございました。

（2010年1月9日）

6. 遠野盆地の外の話―99話―を読む

今日は、いくつかこれからお話ししますが、『遠野物語』のおもしろさのひとつに、臨死体験があります。死の世界と今の世界を行ったり来たりする体験です。たとえば、三途の川を渡る寸前まで行ったことがあるという話を聞かれたり、実際にご自分が体験したりことがありますか。柳田の読書量はすごくて私などが紹介できないほどなのですが、江戸期の随筆だとか国学の本はほとんど読みつくしています。その中に、江戸期の人たちも、やはり死後の世界に行って帰ってきた、死んだ世界に行って帰ってきた話というのは、たとえば平田篤胤という国学者が、『仙童寅吉物語』というのを書きます。三途の川を渡って向こうまで行って戻ってきた、その寅吉という子供の話なのです。柳田はそのような本をすでに読んでいるわけです。喜善が語る遠野の話のなかの、「オマク」とか「シルマシ」などといった不思議な話を聞きながら、柳田は、自分の読書体験で得た感覚を思い出していたのではないでしょうか。

臨死体験ということで、今ふと思い出したのですけど、私の祖父は、100歳まで生きたんです。亡くなってから20年以上たちますが、100歳まで生きる中で、亡くなる数年前から、もう本当に危ないとかと言って、何回か母が看病に行っていました。それで、大丈夫だと言って帰ってきたときの話でおもしろい話があって、臨死体験なんですが、お医者さんから今夜が峠だと言われたけど、その日は大丈夫で、明け方に、みんなに話をして、「いやあ、俺は川を船で渡っている夢を見た」というんですね。そして、向こう側には、先に亡くなっていた妻、つまりおばあちゃんが向こうで「帰れ」と言う仕草をしていたから帰ってきたと言うのだそうです。つまり、向こうが死後の世界で、三途の川ですよね。で、「帰れ」と言われたから帰ってきたんだ、と。それで「おばあちゃんは何をやっていたの？」と聞いたら、「畑で働いていたんだ」ということで、「なんだ天国でも働くのか」とみんなで笑ったという話です。こういう話はたくさんありますよね。この祖父の別の時の話ですけど、うわごとで、女の人の名前を言ったというんですね。祖父には子どもが７人いるんですけど、みんなが１度も聞いたことのない女の人の名前をいうもので、みんな慌てたらしいです。結局これも、１番初めの子で死産してしまった子の名前で、夢のなかでその子に会ってきたというわけだったそうで、みんなでほっとしたという話です。みなさんも、似た話はたくさんおもちでしょう。本当に臨死体験というのはあるんだなと思います。

そして、柳田は、このような話が渦巻いていた「遠野盆地」の話を記録し、同じような話をもっと集めようと喜善に催促したり、他の土地でも同じような『〇〇物語』が登場してくるのを願ったりするわけです。

そこで、この「遠野盆地」にこだわって、『遠野物語』の話を読んでみたいと思います。

先ほども話ましたが、柳田の毛筆稿本と刊本との比較でわかったことは、重要な点だけでも３点ほどありました。今は、この３部作は、池上家から遠野市に寄贈されていて、博物館で見ることができますし、現在刊行中の『柳田國男全集』にも掲載されているのですぐに見ることができます。一番大きな点は、簡単に言いますと、柳田が喜善から聞いたのは明治41年、２年のことで、本が出るのは明治43年のことですから、原稿と刊本の時差が１年かそれ以上あるわけです。柳田は、この１年をすべて考慮して書き直しているわけです。たとえば、「これは二、三年前の話なり」という話は、「これは三、四年前の話なり」とか、「十二、十三年前の話」は「十三、十四年前の話」、「昨年の『遠野新聞』」は、「一昨年の『遠野新聞』」といったように全部書き直しているのです。これを見つけた時は、本当に驚きました。柳田が序文でも書いていますが、「眼前の事実」なのだということがひしひしと伝わってきた感じがしました。

生まれてきた河童を切り刻んでしまう話でも、刊本には、「如法の豪家なり」と言って名前が出ていませんが、ところが毛筆の方はここに実名が入っていたのです。これもびっくりしました。実名を伏せたというのは、柳田の現実に対する配慮だったということで発表したのですが、その後、いろいろな解釈も出てきているところです。

私が発表した「初稿本『遠野物語』の問題」でも、最後に問題提起だけした点があるのですが、それが、「遠野盆地」にかかわる問題です。それは、毛筆稿本には、番号横に小さな丸印が書かれている話が三つあったのです。

ひとつは、毛筆稿本の「八十三」話で、刊本では「八十四」話の喜善の祖父の話で山田湾の「異人」の

話です。さらに、毛筆「九十五」話で、刊本「九十九」話の「三陸大津波」の話と、毛筆「百」、刊本「百六」話の山田湾の「蜃気楼」の話の三つです。

この三つの話に付けられた小さな丸印のことは、その後の研究の中でもあまり触れられないことなので、どうしてここに小さな丸印を柳田が書いたのかということを、みなさんと一緒に考えてみたいと思っています。

毛筆稿本で「九十五」話で、刊本「九十九」話を今日は、印刷してきました。これは、土淵の北川清さんの家の話です。清さんの息子さんが真澄さんで、柳田が遠野に来たときに、ここ附馬牛を附馬牛小学校の教員だった真澄さんが案内したと言います。郵便局のあたりに村役場があったと聞いていますけども、附馬牛の村役場で書記の末崎子太郎さんとか、附馬牛小学校の校長先生の福田恵次郎先生、たぶん校長室に写真が飾ってあるのではないでしょうか。柳田は、その人たちから附馬牛の話を聞いているようです。真澄さんがなぜ附馬牛を案内したかというと、最終的に、東禅師とかを案内して、菅原神社の祭を柳田に見せたかったんだろうと言われています。この辺のことは、遠野物語研究所の高柳さんが書いた『柳田国男の遠野紀行』が詳しいですので、興味ある方はぜひお読みください。

その北川家の話が、今から読む99話です。この話は、稿本と刊本とあまり変わっていないので、せっかくですから、柳田の自筆の稿本の方で読んでいきます。「九十五」の「九」の右上に小さな丸があるのがわかると思います。

「九十五、土淵村の助役北川清の家ハ字火石に在り　代々の山伏にて祖父は正福院と云い学者にて著作も多く村の為に尽くしたる人なり　清の弟福二　海岸の田の浜へ婿に行きたるが大海嘯に遭ひて妻と子とを失い生き残りたる二人の子と共に元の屋敷に小屋を掛けて一年ばかり在りき」

ここで少し説明しますと、「大海嘯」これは「かいしょう」と読みますが、ここでは「おおつなみ」と読む方がいいと思います。これは、明治29年６月15日の三陸大津波の時のことです。この福二さんは、田の浜の長根さんという家に婿に入ったことも、遠野常民大学でまとめた本『注釈　遠野物語』の中に書かれています。昨日、教育委員会にご挨拶に行ったのですが、指導主事の長根先生にお聞きしましたら、三陸海岸沿岸部に長根姓は多いのだそうです。田の浜の長根さんというのは、多分その中でも一番南の方でしょうとおっしゃっていました。

この６月15日という日は、旧暦の５月５日で、津波が襲った午後７時ごろは、節句のお祝いの席があったり、日清戦争勝利を祝う花火大会だったりと、人が大勢集まっている時であったようですね。岩手県だけでも、１万８千人を超える方々が亡くなられています。田の浜は、船越村ですから、調べてみると、船越村では、人口2332人中、804人の方が亡くなっているのです。福二さんの所も奥さんとお子さんが亡くなったという話です。続けて読んでみます。

「夏の初の月夜ニ便所へ起出でしが遠く離れたる所にて其路も浪の打つ渚なり　霧の布きたる夜なるが其霧の中より男女二人歩ミよるを見れば女は我妻なり　思はず跡をつけて遙ニ船越村へ行く崎の洞ある所に追付き名を呼びたるに振返りてにこと笑ひたり　男ハと見れバ此も村の者にて海嘯の難に死せし者なり　自分が婿に入る前より深く心を通ハせたりと聞し者なり　女は今ハ此人と夫婦に成りてありと云ふ子供ハ可愛くは無きかと云へば女少しく顔の色をかへて泣きたり　死したる人と物云ふとは思はれずして悲しく情けなくなりたれば足元を見て在りし間に男女ハ足早ニ立退きて小浦へ行く道の山陰をめぐり見えずなれり　追かけて見たりしがふと死したる者なりしと心付き　夜明迄道中に立ちて考へ朝になりて帰りたり　其様久しく煩ひたりと云へり(此人ハ佐々木君の血族なり　北川氏ハ祖母の生家)」

悲しい話ですよね。なぜか幽霊がでたとか、お化け話とかで語れないような話です。

今読んだのは、毛筆稿本ですが、刊本と違う所は、「遙ニ」という所が「遙々と」となっていて「はるばると」と読ませている所だけです。それだけ柳田のなかでは、しっかりと出来上がっていた話だったのでしょう。

私は、初めこの小さな丸は、あとから聞いた話とか、自分が遠野に行った時に、北川真澄から聞いた話を意味しているのかなと思っていましたが、そうではなく、喜善が語っていたこととわかり、やはり、盆地の外の話を表しているのだと思うようになりました。

では、喜善はどのように語ったのかということと、同じ場で聞いた葉舟はどのように聞いたのかがわかる二つの資料を読んでみます。これは、ずっと以前、岩本由輝さんからいただいた資料です。

まず、佐々木喜善が多分このように話したのではないかと思われる資料です。これは、喜善の「緑女綺聞」にのっている話です。後に『農民俚譚』(1934年5月、一誠社刊)にも収められます。

「遠野物語にも其の大筋は載つてゐるが、極く私の近い親類の人で、浜辺に行つて居る人があつた。明治二十九年かの旧暦五月節句の晩の三陸海岸の大海嘯の時、妻子を失つて、残つた子女を相手に淋しい暮しをして居た。五月に大津浪があつて其の七月の新盆の夜のこと、何しろ思ひ出のまだ真新しい墓場(然しこの女房の屍は遂に見付からなかつたので、仮葬式をしたのであつた)からの帰りに、渚際を一人とぼとぼと歩いて来ると、向ふから人が此方へ歩いて来る蔭が朧月の薄光りで見える。併かも其れはだんだんと男女の二人連れであると云ふことが分つた。それが向ふからも来る、こつちも行く・・・で遂にお互に体も摺れ々々に交つた時、見るとそれは津浪で死んだ筈の自分の女房と、兼ねてから女房と噂のあつた浜の男であつた。其の人の驚いたことは申すまでもなく、併し唖然として二三歩行き過ぎたが、気を取り直して、振り返り、おいお前はたきの(女房の名前)ぢゃないかと声をかけると、女房は一寸立ち止まつて後を振り向き、じつと夫の顔を見詰めたが、其のまゝ何も云はずに俯向いた。其人はとみに悲しくなつて、何たら事だ。俺も子供等もお前が津浪で死んだものとばかり思つて、斯うして盆のお祭をして居るのだのに、そして今は其の男と一緒に居るのかと問ふと、女房はまた微すかに俯首いて見せたと思ふと、二三間前に歩いて居る男の方へ小走りに歩いて追ひつき、さうしてまた肩を並べて、向ふへとぼとぼと歩いて行つた。其人も余りのことに、それらを呼び止めることさへ出来ず、たゞ茫然と自失して二人の姿を見送つて居るうちに、二人はだんだんと遠ざかり、遂には渚を廻つて小山の蔭の夜霧の中に見えなくなつてしまつた。それを見てから家に還つて病みついたが、なかなかの大患であつた。此の話は本題とは自然と趣きが異うであらふが筆が思はず斯んな風に滑つた。」

どうですか。喜善が語った長根福二さんの話は、死んだと思った妻が実は生きていて、「モトカレ」とよりを戻しているという話にとれますね。同じ話を聞いていた水野葉舟も、この話をそのように聞いていたようです。葉舟の「怪談会(上)」という話の中に収まっています。全部読むと長いので、一部分だけ紹介します。葉舟のは、『遠野物語』と同じく、便所に行った時に遭ったことになっています。

「田舎の便所は母屋から離れて外にあるので、家を出て行くと、その晩は非常に月が澄んだ晩だつた。すると向ふの方から女がスタゝゝ歩いて来る。近づいて来るのを見ると夫は死んだ細君だつた。それで、お前は今何処に居ると聞くと、女はにやゝゝ笑つて私は今、あっちに(来た方を指して)ある男と夫婦になつて居ます、と言つて夫にはかまはずにどんゝゝ山の方へ行き出した。(その男と細君とは昔の恋仲だつた。それは叔父も知つて居た。)」

葉舟は、どことなく都会的ですね。田舎の便所が外にあるのを説明したり、「細君」とか「恋仲」といった言葉を使ったりして。同じ話でもこのように違ってくるのだということを改めて感じますね。

みなさんは、どれがぴったりときますか。人それぞれ好みがあるので、判断はおまかせしますが、想像力を駆り立ててくれるのは、『遠野物語』だと私は思うのですが・・・。

さて、この船越村の話と、山田湾の二つの話に丸が付けられているのをどう判断するかの話に戻ります。これは、三つとも「遠野盆地」の外の話で、柳田は、最後まで入れるかどうか迷った印だったのではないかと私は考えました。稿本には無くて、後から『遠野物語』に入れた話の中にも、「遠野盆地」の外の話が

あり、最終的におもしろさと、人間関係のつながり、実在の人物の話ということで入れたのではないでしょうか。小さな丸印から、当時の柳田の『遠野物語』にかける思いを想像してみるのも楽しいでしょう。

7. 明治43年5月21日の柳田日記を読む

先ほども述べましたように、柳田は「遠野物語」と同じような話を日本全国から集めたいと思っていました。その一つの証拠として、「五十年前の伊豆日記」という柳田の日記をコピーしておきました。発表したのが、昭和35年で、その50年前の明治43年の５月の日記で、伊豆に旅行に行ったときの日記なのです。

明治43年５月というのは、柳田は『遠野物語』の原稿を印刷屋さんに出して、ゲラが上がってきて、もう完成を待つだけという時です。今年の、６月14日に遠野市では、発刊100周年の記念イベントをすると思いますが、実際に柳田の手元に完成した『遠野物語』の本が届いたのが６月９日と言われています。９日に柳田は本を手にして、「良き感じなり」と言って、350部のうち１番から５番を佐々木喜善に送ったと言われています。話は飛びますが、柳田は、佐々木喜善が亡くなった後も、『遠野物語』は昭和10年に増補版が出たり、文庫本がでたりして印税が入る度に、喜善の奥さんの所に送っていたようです。私は今、柳田の年譜を作るために、わかった情報をパソコンに打ち込んでいますが、柳田が生前最後に仙台にいる堀一郎の家に遊びに来る時に、娘婿の堀一郎は、多分、東北に来るのは最後だろうということで、東北中から民俗学者を集めます。その時に、喜善の息子さんの広吉さんを呼んで、柳田が喜ぶという場面を先日、入力したばかりです。そのくらい、喜善に敬意を払っているということなのですが・・・。

ちょっと余談になりましたが、それだけ『遠野物語』を佐々木喜善と一緒に作ったんだという柳田の思いがあったと思います。それで話を戻しますと、６月９日に本ができる前の５月の下旬に伊豆に旅行に行くのです。これは単なる休養の為の温泉旅行だけではなく、静岡にいる山中共古という人物に会いに行くわけです。柳田と共古とのやりとりが『石神問答』という本になったのですが、その山中共古に会いに行く目的を兼ねた温泉巡りの旅行です。

その５月21日の日記をご覧ください。柳田は、生涯旅をし続けますが、旅館に泊まるとよく「按摩」を頼んで話をします。「按摩」という言葉は、今は使わなくなっているのでしょうが、原文のまま読んでみます。

「夜按摩をたのみ療治をさせながら土地の話を聴く。二十四五才にて目つぶれたる今四十七八才の男、もとは船田とかいふ処の百姓なり。以下その話なり。若い頃までは神隠しといふこと多くありき。草刈りに行きし十五六才の男の子、見えずなりて三日目の朝、二町ばかり離れたボサの中に隠れてありしを見出せしことあり。何を問ひても知らず。今もまだ生きてあり。二十年ばかり前、ある男提灯をつけて炭焼竈を見に行きしに、道の傍に丈のきはめて高き男立てり。山男なり。見上ぐれば幾らでも高くなるといふことを聞きてあれば、つとめて下を見て通り過ぎたり。かういふ話は多く聴いた由。ある鉄砲の名人山に入りしに、大なる鹿この方へ近より、じっと自分を見たる顔、笑ふやうに見えて身の毛立ちたり。鉄砲を見合はせて居れば限りも無く動かずに居る故、試みに少し眼をそらしたれば、その間に忽ち見えずなりたりといふ。狐にばかされし話は多し。狐をキンコサマとも謂ふ。キンコは鳴き声から来た名なりといふが如何のものか。斯ういふ話を数多くしてくれたり。この夜蚤が多くて睡られず。朝も亦早く起きてしまふ。」

『遠野物語』ほどのおもしろさは感じられないでしょうが、どんな話に興味をもっていたかがわかります。そして、なぜか、文体も文語体です。「今もまだ生きてあり」という書き方は、『遠野物語』にもよく見られます。まだこの人は生きているという書き方をしています。それから、「二十年ばかり前」とありますが、この「何十年ばかり前」という書き方も『遠野物語』の書き方です。柳田はこういうときに、『遠野物語』では、「二十一年前」とかく厳密に書いていることは、先ほどお話した通りです。『遠野物語』がもうすぐ刊行されるという時期に、このような日記を書いているということで、当時の柳田の心の高ぶりを想像してみてください。